

欧米大学院出願プロセス

2011年12月 UT-OSAC

1. はじめに

この資料は、学部卒・修士卒から、欧米の大学院でPh.D.取得を目指す人を対象とし、その出願プロセスを説明します。

一言に欧米大学院の出願プロセスといっても、国、学校、専攻によってさまざまなバリエーションがあります。そこで、本資料では、米での出願をベースとした一般論を主に紹介します。欧の大学院出願は一般に米よりも多様なため、欧に関しては一部典型的な例を言及するに留めてあります。ご了承ください。(付録のリンク集に詳しい英国留学の情報がありません)

また本資料内の「In My Honest Opinion」と記された欄は、資料編集者やその知り合いの個人的な見解・経験を元にした情報です。

2. 受験準備概要

欧米の大学院には日本で見られるような「入学試験」がありません。そのかわり、複数の(一元的な序列の付きにくい)要素をもとに合否判断が下ります。以下が標準的に必要な要素です。(これらがすべて必須とは限りません。各項目の詳細は後述参照。)

- TOEFL/IELTS 英語でのコミュニケーション能力を測る試験です。主に「足切り」として使用されます。プログラムの募集要項に最低点が発表されていることもあります。
- GRE (General/Subject) 米大学院の「共通一次試験」です。スコアはETSという機関を通して直接大学院に送られます。GRE Subjectは年3回、かつ、開催地が非常に限られている(例:札幌or福岡or那覇)ので、要注意です。
- GPA 大学での成績総合スコアを換算して提出します。
- エッセイ(Statement of Purpose)、業績 自分の今までの研究成果、これからの意気込み/抱負/研究方針や、プログラム/希望ラボに所属したい動機などを熱く語ります。一部の大学院では、過去の業績や論文のコピーの提出を要求されることもあります。
- 推薦状(Recommendation Letters) 通常3通。出願者のことを知る人、その分野で名前が知られている人からの推薦状をそろえます。
- 面接 電話or訪問。自分の研究実績、興味のある分野、将来ビジョンなどを聞かれます。

準備のプロセスとしては、次のようなものとなります。(この順番とは限りません)

- 出願校・コース選び : なるべく早く!
- 経済援助、奨学金出願 : 7~12月
- TOEFL/IELTS、GRE受験 : 前年~12月
- エッセイ、推薦状用意 : 前年~12月
- 出願 : 12~1月
- 面接 : 1~3月

3. 受験プロセス詳細

この章では、上記のそれぞれについての詳細をご紹介します。

3-1. 出願校・コース選び --Masterコース と Ph.D.コース--

多くの大学院でMasterコースとPh.D.コースが用意されています。しかし、その二つの位置づけは学校や専攻によって全く違います。出願前に志望校の制度を確認しましょう。

- 米・英の多くの学校では、学部から直接Ph.D.コースに出願することができます。しかし、一部の専攻(工学など)では、Masterコースを修了しないと、Ph.D.コースに出願できないこともあります。(例:MIT 航空宇宙) 逆に、理学数学系の学科ではMasterコースが存在しないというケースも多くあります。
- 同じMasterコースでも、修士論文が必要な場合(例:MIT 航空宇宙)と、修士論文が不要な場合(例:Stanford 航空宇宙)があります。所要年数は一般に1~2年です。
- Ph.D.コースでは博士論文が必要です。所要年数については米では画一的なシステムがなく、3~8年所要します。英では平均3~4年で取得できます。
- 米の多くのPh.D.コースでは、2年目にQualifying Exam(通称Qual)、すなわち課程継続資格試験があります。このQualは学校や専攻によって大きく倍率が異なり、ほぼすべての人が合格するところ(例:MIT 電気)もあれば、30%の合格率しかないところ(例:MIT 航空宇宙)もあります。通常、Qualは2回落ちると、退学、もしくは、Masterコースに降格となります。
- 出願校を選ぶ時は、当然ですが自分のやりたいことができる研究室がある大学を選びます。有名な大学に行っておいて間違いはないというのは事実ですが、大学側は誰をどの研究室にマッチングするか、を常に念頭において学生をとっています。そもそもマッチしなければなかなか受け入れられませんし、入ってからお互い不幸な結果となります。

In My Honest Opinion...

画一試験がないということは、利用できるリソースをどんどん活用する人が有利になるということでもあります。例えば出願先とのコネクションはとても重要です。「コネ入学」という響きが悪いようですが、欧米の大学院入学では全くのフェアプレーであり、むしろ学科の誰か(教授・ポスドク・大学院生)が知っている人間が喜ばれる傾向があります。アドミッションの担当教授は、興味のある候補に関して出願書類から読み取れる以上の情報を欲しています。

まずは出願先に直接の、もしくは普段接する人を通じた知り合いがいるか確認しましょう。いる場合は、必ず出願する旨を伝え、また願書のコメント欄等にそのつながりを明記します。

既存のつながりがない場合は、ためらわず出願先の教授と事前にコンタクトを取ることをお勧めします。コンタクトの方法はさまざまで、メールや訪問、あるいは学会でつかまえるなどが考えられます。コンタクトしだいで、コネは自らつくることができます。ぜひ出願前の早い時期に希望する教授にコンタクトをとってみてください。

また、一般的に欧は米よりも教授との相性を重視すると言われています。

3-2. 金銭面の準備 --経済援助と奨学金--

米の多くのPh.D.コースでは、学費＋生活費全額がRA (Research Assistant:研究室の予算), TA (Teaching Assistant:学科の予算), Fellowship(大学等からの給与奨学金)などで賄われます。ただし、経済援助の捉え方は専攻によって異なります。

理数系では一般に学生全員が何らかの形で援助されて当然と考えられており、早いうちに学生にRA「雇い口」を見つけることを促す一方、見つからない学生にもある程度はTAとしてのセーフティネットが存在します。あまりに長くRAを見つけられない学生は退学となります。工学系では(稀ですが)自費で研究を続けるオプションもある一方、あまり寛大な救済措置はありません。人文系ではTAが主な援助の出所となります。もちろんこれらの事情は全て大学にもよります。必ず出願先のウェブサイト等で金銭援助について確認しましょう。

いずれのケースであっても、外部資金源(奨学金)を得ることは非常に有利に働きます。これは100%経済援助のある学科であっても同様です。

奨学金出願は通常7月～12月で、出願書類準備と同時進行で進みます。奨学金の志望度を決める際の基準は、次のようなものになります。

- 審査時期: 出願前(12月)に奨学金の合格が確定しているものが望ましい。
- 給与金額: 月額、学費支給の有無、給付年数
- 審査倍率: 2倍程度～数百倍程度とさまざま。
- 留学終了後の縛り: 留学終了後の帰国義務の有無

しかし、基本的に給与(＝返還不要)奨学金の選考はかなり倍率が高いので、条件の合致する給与奨学金はすべて出願することをお勧めします。

資料末尾の付録にUT-OSACで把握している奨学金のリストが掲載してあります。

In My Honest Opinion...

上記のように、奨学金によって倍率が大きく違いますが、倍率は意外と金額に比例しません。

低倍率で条件のいい奨学金を見つける一つのコツは、分野の制限に注目することです。なぜなら、制限のある奨学金は条件がいいことが多く、また応募の母数も小さくなりがちだからです。しかし実際は制限が厳密であることは稀で、非常に広義での関連分野であれば、一見対象外の奨学金も受給可能です。

じっさい、例えば「情報科学分野」という制限のある船井情報科学振興財団の給与奨学金も、受給者の中には航空宇宙、物理、建築など、さまざまな分野の学生がいます。

また、奨学金の財団は必ずしも詳細な研究計画のある学生を探しているわけではないようです。留学に寄せる意気込みや長期的な展望をまずはしっかりと伝えることが大切です。

尻込みせず多くの奨学金に応募してみるといいでしょう。

3-3. TOEFL/IELTS、GRE

TOEFL/IELTS、GREは欧米の大学院出願で唯一試験勉強が必要になる要素です。

TOEFL/IELTSは留学生向け英語試験です。その要求点数は学校・専攻によって大きく違っており、チェックする必要があります。一般的に、英の大学院は各セクションに要求点がついていて(例: TOEFL各セクション25点以上/IELTS各セクション7以上)、米の大学院は合計点に要求点がついています(例: TOEFL合計100点以上)

/IELTS全体7以上)。また、TOEFLとIELTSのどちらが必要かについても要注意です。従来、米ではTOEFLが主流でしたが、近年IELTSしか認めない場合(例:MIT 機械工学)や、そもそもTOEFL/IELTS不要という場合(例:MIT MBA)まで出てきました。

GREは、米の大学院の統一試験です。(英でもまれに必要です。) Verbal Reasoning(文章読解と語彙)、Quantitative Reasoning(論理と数学)、Analytical Writing(ライティング)の3科目からなる一般共通試験Generalと、Physics(物理)やPsychology(心理学)などの各科目の専門試験Subjectがあります。Subjectの要不要は専攻によりますが、両方必要な場合は、Subjectが一般に重視されます。また、Webなどで合格者平均点を公開している専攻もありますので、チェックしてみてください。なお、GREは過去の受験分の点数も大学側に送られる仕組みのため、十分に準備してから受験することが望ましいです。またGREが不要な専攻(例:MIT Media Lab)もあります。

In My Honest Opinion...

TOEFL/IELTSは主に足切りに使われますが、点数が満たないからといって即不合格となるとは限りません。目安はTOEFL iBTで90から100点と言われていますが、数点満たない程度ならあまり時間を費やさない方がいいかも知れません。

GRE Generalについては、基本的に全セクションのスコアが評価されます。ただ、少なくとも昨年までのGREではVerbalの語彙かなりマニアックだったこともあり、理工系では、VerbalやAnalytical Writingは良いに越したことはないが必須ではないというのが一般認識となっています。(Verbal 320/800やAnalytical Writing 3.0/6.0でのトップ校工学系合格者もいます。)人文系ではVerbalやAnalytical Writingが重視されるケースもあります。

3-4. エッセイ

出願プロセスで一番重要な部分はエッセイ(一般にStatement of PurposeやPersonal Statementと呼ばれます)と言われています。エッセイの内容や長さは各学校や専攻によって違いますが、通常は自分のこれまでやってきたこと、これから大学院でしたいこと、大学院修了後の計画を書くものだと言われています。過去、現在、未来が一本の線で明確につながっていて、その線の中でこの大学院がどうしても必要であり、自分もこの大学院に対して他の人にはできない貢献ができる、という内容を、熱意をこめて書いたものが好まれます。また、インターンや、論文や受賞などの業績があれば、ぜひここでアピールしましょう。ただし、業績の羅列だけでは不十分です。

エッセイの書き方に関する本や有料添削サイト(例:Essay Edge <http://www.essayedge.com/>)もたくさんありますので、ご参照ください。また、たとえ有料添削サービスに頼らなくても、必ずネイティブの方に一度添削を頼みましょう。エッセイはよほどのことがない限り、長すぎないほうが良いです。特別な指示がない限り、A4用紙1枚半~2枚程度を目安としてください。

3-4. 推薦状

推薦状は通常3通要求され、客観的な評価基準として重要な要素の一つです。推薦状を頼む相手ですが、指導教員をはじめとして、まず自分のことをよく知っている人であることが鉄則です。自分のことを長く知っている人の推薦状であればあるほど、説得力があると見なされます。出願時に論文提出などが求められる学校や専攻では、その論文を知っている人からの推薦状が必要になります。また、出願している分野で名が知られている人の推薦状も有効です。もし志望校とつながりのある人からいただければ、それもととも有効です。

In My Honest Opinion...

推薦状というと、どうしても書いてしまうあやふやな物のようで、それで合否判断が大きく左右されるというのは不思議なような気がします。実は想像以上に正直に書かれるものなのです。これは、下手な人間を強く推薦してしまったら推薦者本人の評判に跳ね返るため、推薦状では誰も彼もをベタ褒めするものではないという共通理解があるためです。それは同時に、stakeholderである同業者(同じ分野の大学教授等)からの推薦状に重きが置かれる傾向があるということでもあります。

3-5. 出願

多くの欧米大学院では、早く出願すると合否に有利に働くといわれています。それらの学校では一斉に入学審査がされず、書類の届いた人から審査がされて合格者の枠が埋まっていくからです。そのため、志望校の審査方法を事前に調べ、そのような学校へは締め切りにとらわれず早く出願しましょう。また、TOEFLやGREのスコアはETSという機関を通して直接提出しますが、トラブルが多発します。せっかく早く出願してもスコアが届かなければ審査されませんので、少しでも不安があればスコアが届いたかを大学側に確認することをお勧めします。(4校出願して2校でスコア送付トラブルがあったケースもあります。)

成績送付のシステムも若干分かりにくいので注意が必要です。受験時に送付先を数校選べるのですが、例えばGeneralを受験後に志望校が変わり、Subjectで新しい志望校を指定したとすると、Generalの結果は新しい志望校に自動的に届きません。改めて成績送付を依頼(有料)する必要があります。

3-6. 面接

一部の学校や専攻では、書類審査を通過した後に、面接が用意されています。通常、面接に呼ばれた時点で既に厳しい競争をくぐり抜けていますが、合否を大きく左右する部分でもあります。面接の有無・形式は学校や専攻によってさまざまで、志望校の情報を早いうちに確認しましょう。

3-7. その他

以上の説明では触れられませんが、GPAも非常に重要な要素の一つです。GPAは在籍大学の履修単位の優、良、可、不可の割合で計算されます。(東大の場合「不可」は成績表に載らないので入りません。)そのため日頃から「優」を多く取得することをお勧めします。

また、それ以外に出願に有利に働く要素としては、論文発表・受賞、インターン経験などが考えられます。学校や専攻によっては過去の論文の提出を求められます。推薦状やエッセイのネタづくりとしてというよりも、今後の研究のために、積極的にたくさんの経験を積むことをお勧めします。

4. おわりに

以上が、標準的な欧米大学院受験プロセスとその詳細です。しかし、上でも述べた通り、欧米大学院は本当に多種多様です。ぜひ一つの情報源だけにとらわれず、自分の出願先に関連するさまざまな情報を積極的に仕入れてください。

健闘をお祈りします。

5. 付録

5.1 参考ウェブサイト

- UT-OSAC <http://ut-osac.org/>
 - Oxbridge Factbook 2011 (Oxford/Cambridge留学ケーススタディ) http://ut-osac.org/data/oxbridge_fb2011.pdf
- カガクシャネット <http://kagakusha.net/>
- 理系留学のススメ(是永淳さんのサイト) <http://jun.korenaga.com/>
- 日米教育委員会 <http://www.fulbright.jp/>
- 研究留学ネット <http://www.kenkyuu.net/>
- 米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

学生会サイトより:

米国大学院学生会は、学位留学を志す日本の学生を支援するため、アメリカで学ぶ留学生・留学経験者有志によってつくられた団体です。以下の三つを、私たちの柱とします。

- 留学説明会 - 今回のような留学説明会を、日本全国で定期的に開催されるような仕組みを作っていきます。
- メンタープログラム - 学位留学を志望する日本の学生に対し、留学経験者がマンツーマンのメンターとなり、エッセイの書き方や留学準備についてアドバイスをします。
- ニュースレター - 留学経験者が、学位留学の体験談や研究紹介、自分の大学の自慢などを、メーリングリストへ定期的に配信します。

5.2 奨学金情報

日本の留学奨学金情報は日米教育委員会 (<http://www.fulbright.jp/study/res/shokin.html>) に掲載されています。以下が2010年時点で、日本の主な海外大学院留学給与奨学金です。経済や教育などの専攻は他にも奨学金がありますので、チェックしてみてください。

- 船井情報科学振興財団 <http://www.funai.or.jp/>
- 伊藤国際教育交流財団 <http://www.itofound.or.jp/>
- 村田海外留学奨学会 <http://www.muratec.jp/ssp/>
- 中島記念国際交流財団 <http://www.nakajimafound.or.jp/>
- 平和中島財団 <http://heiwanakajimazaidan.jp/>
- JASSO http://www.jasso.go.jp/scholarship/long_term_h.html (出身大学制限あり)
- 吉田育英会 <http://www.yvf.or.jp/> (出身大学制限あり)
- 国際文化教育交流財団 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/ishizaka/ishizaka.html> (出身大学制限あり)